

旧浜寺公園駅舎のエスノグラフィー：記憶を伝承する場所

森田大史

キーワード：サードプレイス、保存活用、記憶の場、地域活性

要 旨

本稿では主にサードプレイス論を交えて、南海電鉄旧浜寺公園駅舎（以下、旧駅舎）を中心に形成される地域コミュニティがどのような性格を帯びているかについて、フィールドワークを通して調査する。具体的には、旧駅舎が現在どのように地域と関わっているのか。そして今後どのように関わっていくだろうかという2つのリサーチクエスチョンのもとで研究を進めた。

現在、旧駅舎はNPO法人浜寺公園駅舎保存の会による維持管理され、地域活性のために活用されている。サードプレイスの概念が多様化する現代においても、旧駅舎は伝統的サードプレイスの性格を残し、地域の人々が気軽に訪れることができる場所となっていた。それを踏まえて、多様化するサードプレイスの中で旧駅舎の属する位置を改めて確認するとともに、旧駅舎におけるサードプレイスがどのような経緯を経て成立したのかを確認することで、旧駅舎でサードプレイスを成立させたキーパーソンの方々に、浜寺で過ごした思い出という個人的背景が垣間見えることが明らかになった。

第1章、第2章では研究を行うきっかけとなった筆者の体験と、旧駅舎の所在する浜寺という街の歴史を詳しく振り返る。第3章では実際に旧駅舎に赴き、フィールドワークを通して得たことをまとめ、第4章ではそれらを踏まえ、旧駅舎で展開されるコミュニティに関する考察を行っている。旧駅舎が今の形で存在できるのは、南海電鉄の高架化工事が終了するまでの約5年間のみであり、それまでに本稿をしたためることができたのは、現在の旧駅舎の姿を残していけるという点でたいへん意義のあるものだと感じている。